

編集後記

すでに、12巻1号の村上教授の巻頭言にものべられているように、「胃と腸」の表題が「胃と腸」となってから、はじめての腸疾患の主題にS状結腸癌がとりあげられた。

S状結腸は直腸とならんで、大腸癌の最も多い部位で、しかも比較的検査のむずかしかった所である。

注腸X線検査や内視鏡検査が胃の検査と同じように、広く一般医家に用いられなくてはならないが、政氏は今までの装置でコーティングのよい容易なルーチン検査法を提唱し、松浦氏はジャイロスコップを自動化し、検査の一般化を強調している。精密検査は狩谷氏らにより拾いあげるのは容易であるが、早期癌の性状診断については、内視鏡の併用の必要性がのべられている。また丹羽氏らによりS状結腸までは、短かい大腸ファイバースコープにより、容易にルーチン検査として用いうることのべられている。

外科的立場より北條氏は、S状結腸癌が他の大腸癌より予後がよいとの結論を出されている。

今後の課題として、佐々木氏らのCEAによる大腸癌の診断も多くの興味を持たせるものである。症例報告でも、山本氏らの本邦では少ない偽膜性大腸炎の1治験例をはじめバラエティーにとんでいる。

<西 沢 護>

<編集> 早期胃癌研究会